

# アメリカ合衆国とカナダのエスニシティ比較論

—メルティング・ポット 対 文化的モザイク—

倉田和四生

はじめに

- [1] アメリカとカナダにおけるエスニック・グループの相違点
  - [2] エスニック・マイノリティ文化の保持
  - [3] マイノリティへの偏見と差別
  - [4] 社会経済的地位の比較
- むすび

## はじめに

アメリカとカナダはともに移民によって構成された多民族社会であるが、黒人の受入れと最初の基幹となった移民（イギリス系とフランス系）の定住の仕方が違うため、二つの社会がかかえている課題も、当然、違ったものとなっている。

アメリカにおいて最も重要な問題はマイノリティとしてのアフリカ系黒人の子孫をいかに白人中心のアメリカ社会に、平等の権利を確保しながら、包摂統合するかという重い課題である。

その為には長い間なされて来た差別をとり除き、平等な参加を保障することによって、白人と黒人の間に存在する現実的な富と収入のギャップをどう埋めるかという経済的な課題が残されている。そこには数多くの困難な障害が存在しているが、1960年代以降、統合に向って着実な前進がなされつつあるといえよう。

これに対してカナダの場合には、重要な課題は英語圏とフランス語圏との融和の問題であり、基本的には文化的、政治的なものである。

次に二つの社会は同じように移民を受け入れてその構成員として来たが、両者の社会構造の性格

は大きく異なっていると考えられている。すなわちアメリカは「メルティング・ポット」の装置であるのに対して、カナダは「文化的モザイク」をなすと考えられている。M. ゴードンの同化の類型にあてはめると、アメリカは第Ⅱ段階のメルティング・ポットであるのに、カナダはむしろ第Ⅲ段階の文化多元主義に対応したモザイクをなすとされている<sup>1)</sup>。すなわちカナダのマイノリティのあり方はアメリカのマイノリティのあり方とは違っていると観念されているのである。

本稿においてはこのようなアメリカの「メルティング・ポット」に対してカナダの「文化的モザイク」という「既成観念」が事実上、どの程度まで妥当性をもつものかについてライツとブレトンの業績をベースにしながらか調査データにもとづいて検証してみよう<sup>2)</sup>。

## [1] アメリカとカナダにおけるエスニック・グループの相違点

アメリカ社会とカナダ社会の相違をシンボリックに表現したものとして「メルティング・ポット」と「文化的モザイク」という語句がよく用いられているが、ライツとブレトンはこれをさらに具体的に五つの主張に集約している<sup>3)</sup>。次にこれらの仮説的主張を吟味してみよう。

- (1) エスニック・コミュニティ・ライフはアメリカよりカナダにおいて顕著に観察される<sup>4)</sup>  
この主張は確かに妥当性をもっている。しかし

1) Gordon, M., *Assimilation in American Life*, 1964.

2) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994.

3) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 6-16.

4) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 6.

そのことはカナダのエスニック・マイノリティに対する「同化の圧力」はアメリカのマイノリティにかかる圧力よりも弱いということを必ずしも意味しない。というのは、このような事実はエスニック・コミュニティの世代構成の比率と深い関係があるからである。これまでの両国の研究によるとエスニック・コミュニティへの愛着は世代と深く関係している。移民（一世）はエスニック・コミュニティに深い関心をもつが、二世・三世になると関与は次第に薄れて来る傾向がある。そこでエスニック・コミュニティの中で一世の割合が多いほどコミュニティの連帯が強く、その存在が顕著となる筈である<sup>5)</sup>。

このように考えると、エスニック・コミュニティがカナダにおいてより顕著に見られるのは、アメリカに比べカナダの方が移民（一世）の割合が多いことによるものであって、同化の圧力がアメリカの方が強いからというわけではない。

カナダは1991年に移民は総人口の16%を占めているのに、アメリカは1990年に8%を占めるにすぎないからである。したがって移民の割合が多いことがカナダの特質といえよう<sup>6)</sup>。

## (2) カナダ政府は文化多元主義をとっているが、アメリカはそうではない<sup>7)</sup>。

これも事実であるが、その実質的な内容を吟味してみよう。移民の伝統文化の保持により大きな寛容さを示し、そのため資源を用意して、多様性を高める政策がとられているかどうかによって、国のあり方は違ったものとなることは事実である。しかしながら、そのような政策がとられていることが、「同化」を抑えるように作用するかどうかは必ずしも明らかでない。

カナダの公式の文化多元主義は文化的多様性を高めるものとみられる。また同時にアメリカにおけるメルティング・ポットの強調は文化的同化をもたらすものと考えられている。

ところでアメリカで「メルティング・ポット」という語句が盛んに用いられたのは今世紀の初期であったが、この時期は北ヨーロッパに有利な移民の「割当制」を実施した時期であった。ところがこの時期にはカナダでも同じようにアングロサクソンおよびそれに類似した人達に好意的な移民の選択をしていたのである。またこの時期にはカナダでも文化的多様性を最小限におさえようと努力していた。その後、両国ともに次第に文化多元主義が強調されるようになり、最近10年では重要な社会的実践目標となっている<sup>8)</sup>。

カナダはこの点でアメリカに比べそれ程前進しているわけではない。カナダの「文化多元主義」もたかだか30年足らずのことであり、最近では強い批判にさらされている。カナダもアメリカともに公式の見解には、多様性への寛容と同化への勧めが同時に含まれているのである。

そこでメルティング・ポットとアメリカ、文化多元主義とカナダを排他的に結合することは、妥当性があるかどうかかなり疑わしいこととなる。

## (3) アメリカは重大な人種葛藤の歴史をひきずっているが、カナダはそうではない。グループ間の理解をさまたげる障害はアメリカにはあるが、カナダにはあまりない<sup>9)</sup>。

ここ数十年におけるアメリカの人種葛藤に関する事件は世界の注目を集めている。そこでカナダ人は「アメリカ人はわれわれより人種差別をする傾向がある」と考えがちである。

1986年に行われた世論調査によると、カナダ人の72%はアメリカ人よりも黒人に寛容であると答えている<sup>10)</sup>。

アメリカには黒人差別の歴史があるから、偏見が強いが、カナダにはそれがいないから寛容だと考えているのである。

しかし「脅威の受け方の仮説」によると、マイノリティ・グループに対する偏見はその集団のサ

5) Lieberman, Stanley, and Mary Waters, 1998. *From Many Strands: Ethnic and Racial Groups in Contemporary America*, New York: Russell Sage Foundation.

6) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 7.

7) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 9.

8) Gordon, Milton, *Assimilation in American Life*, 1964, ch. 5.

Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 9-11.

9) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 11.

10) *Globe and Mail*, May 6, 1986, P. A7.

イズが大きいと強くなると言われる<sup>11)</sup>。この見解に従うとアメリカ黒人への差別の強さはアメリカ黒人が大きな集団であるということからもたらされると考えられる。また偏見の強さは労働市場における人種間の競争に関係するかも知れない<sup>12)</sup>。疎外された白人は黒人と競合関係に立つためいっそう強い敵意をもつようになるからである。

エスニック・グループ間の関係については、カナダではケベック州の独立問題が存在しているので、アメリカよりカナダが円滑だとは簡単には断定出来ない。さらに多面的な検討が必要であろう。必要なことはアメリカ人とカナダ人が人種関係によって規定された状況にどのように反応するか、の直接的な証拠を探すことである<sup>13)</sup>。

(4) フランス系—イギリス系の関係の歴史はカナダ的伝統の源泉であり、移民マイノリティの取り扱いにも影響する<sup>14)</sup>。

過古30年ケベック独立の問題は常に存在しており、フランス系—イギリス系の関係は常にカナダにおける葛藤の最たるものであった。この関係が移民マイノリティの地位にどのように影響するかは複雑な社会学的研究課題である。

すなわちこれは二文化主義の制度化を求める運動であり、他のエスニック・グループにも文化多元主義の政策を要求させる結果をもたらした。しかし同時にこれはきわめて複雑な反応をひきおこしている。まずイギリス系カナダ人は文化多元主義なるものが自からの最高の地位を相対的に低下させるとともに、混乱をもたらすものであると困惑している。またフランス系の多くもカナダにおける自からの地位（二大勢力の一つ）が他の多くのマイノリティの中の一つに相対化され、低下することを憂えている。最近、ケベック政府による独自の多元文化主義（文化的統合政策）の採用によって問題はさらに複雑なものとなった。ケベック政府は他の言語と文化の併存を支援するかわり

に、マジョリティの文化とマイノリティの文化との融合を促進しようと努めている。

ところでイギリス系カナダ人は支配戦略の一環として、エスニック・グループが文化的一体性を保持するように支援してきたとの見方はジョン・ポーターが彼の論文や著作でカナダ社会の批判を行った際の中心的論点であった。彼によればイギリス系カナダ人のエリートは一方で移民の文化の保持を認めながら、他方において、服従的な地位の容認をとともに求める「植民地主義的国家政策」をとってきたのである。しかしもしマイノリティが彼等の文化を保持することが認められ支援されると、彼等はそれぞれ独自の制度を発展させ、社会的経済的な主流から独立するようになる。そこでエスニック文化の相違を基礎にしては社会制度の維持は困難である。

ケベックに住むフランス系の人達はそこに住む他のマイノリティ・グループの個人的権利をどのように守るのか。ケベック政府は同化政策を推進することによってフランス系と他のマイノリティの間にテンションを生み出している。要するにケベック政府は連邦政府には多元的政策を求めながら、ケベック内で同化（一元的）政策を実施するといった矛盾した政策を実行しており、これが葛藤を生み出す結果となっている。

このように考えると、カナダの二重国家的性格はマイノリティの権利の保証にはならないことが示唆されている。この二重国家的性格から生み出されるカナダの文化多元主義が国内に混乱をもたらす要因でもあることを見逃すわけにはいかない。さらにアメリカとカナダのマイノリティを比較する場合には地域（ケベック）による違いにも配慮する必要のあることを示している<sup>15)</sup>。

(5) カナダとアメリカ両国には一般的な文化的な相違があり、これがエスニック・マイノリティのあり方に影響する<sup>16)</sup>。

11) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 12.

12) Bonacich, Edna. 1972. "A Theory of Ethnic Antagonism: The Split of Labor Market". *American Sociological Review* 37, 5(October): 547-559.

13) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Berton, *The Illusion of Difference*, 1994. 14.

14) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Berton, *The Illusion of Difference*, 1994. 14.

15) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 15-16.

16) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 16.

これまで述べて来たように、自からをアメリカ人とは区別しようとするカナダ人は、その特質として「寛容性」をあげる。それはアメリカ人よりもマイノリティに対して好意をもち、相違を受入れ葛藤をさける慣習である。しかしながらカナダ人が議論ずきで調整的であったとしても、アメリカ人よりも平等主義者であるとは必ずしも断定するわけにはいかない。葛藤の回避は問題を視野の外にしめ出すことによって、むしろ不平等を永続きさせるものとも言えるかも知れない。

またカナダ人とアメリカ人は「個人の権利」と「集合体の権利」のいずれを重視するかで違うと言われる<sup>17)</sup>。S. M. リプセットはアメリカは個人主義的価値、個人間の競争と達成、「機会の平等」を重視するのに対して、カナダ人はエリートに敬意をはらい、「結果の平等」に価値をおくという主張をしている<sup>18)</sup>。アメリカはそもそも帝国主義システムに対して個人の権利を主張する闘争によって誕生した国である。これに反して独立戦争当時フランス系もイギリス系もカナダ人は反革命の立場をとり、伝統的な制度——集団を強調——に愛着を示した。二つの違った文化的集団からなっているカナダは集団に価値を置く生き方に選好を示している。

リプセットはK. マックノートの主張を引用しながらカナダのエリート主義は寛容性を促進するだろうと指摘している<sup>19)</sup>。エリート社会は風変わりな人も容認する伝統があるので、平等主義の社会よりも多様性や文化の違いに寛容になる。またリプセットはカナダの方がアメリカよりも「結果の平等」を強調すると述べている<sup>20)</sup>。そこでカナダの方が虐げられた人達の要求に耳をかたむけ、

差別反対の措置を支持することになる。

ハスティングスはカナダ人がアメリカ人より平等を尊重するが、その差は9% (41%と32%)であると述べている<sup>21)</sup>。また、CARA ギャラップ価値調査では業績にもとずく不平等に対しアメリカ人がカナダ人よりやや高い価の選好を示している。そこでアメリカはメリットクラシーを重視するから差別することが少なく、寛容さが大きくなると言えるかも知れない。これはカナダの方が寛容性が大きいとの仮設に反している<sup>22)</sup>。他方カナダは平等を強調する故にマイノリティに高い位置を与えることになる。

しかしながら、これらの相違は両国間の相違の源泉といえる程大きいとは言えない<sup>23)</sup>。

アメリカの研究者の中にもアメリカ社会は移民にとって「メルティング・ポット」であるとの表現を批判する人も存在している、ネイザン・グレーザーとD. P. モイニハンは1963年の「メルティング・ポットを超えて」においてこれに批判的な見解を述べた<sup>24)</sup>。またゴードンは「メルティング・ポット」を同化の三過程の中位と位置づけた<sup>25)</sup>。

アメリカの世論も批判的見解に沿ったものとなっている。最近の世論調査ではアメリカはメルティング・ポットであると答えた人は20%にすぎなかった。60%の人は移民は自からの民族アイデンティティを保持していると答えている<sup>26)</sup>。

このように見るとアメリカが「メルティング・ポット」でカナダが「文化的モザイク」だとは簡単に断定出来そうにない。その為には両国のマジョリティとマイノリティの実際の行動を観察しなければならない。そしてそれもカナダとアメリカのコミュニティが同じ文化的特徴と歴史を持つ

17) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 16.

18) Lipset, Seymour S., 1963. *The First New Nation*. New York: Basic Books., 1989. *Continental Divide: The Value and Institutions of the United States and Canada*. Toronto

19) Lipset, Seymour S., 1989. *Continental Divide: The Values and Institutions of the United States and Canada*.

20) McNaught, Kenneth. 1966. "American Progressives and the Great Society." *Journal of American History* 53 (December), 504-520.

21) Hastings, Elizabeth, and Philip K. Hastings ed. 1982. *Index to International Public Opinion, 1980-81*. 519-520, 525.

22) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Berton, *The Illusion of Difference*, 1994. 19.

23) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 19.

24) Glazer, Nathan, and Daniel P. Moynihan. 1963. *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians and Irish of New York City*.

25) Gordon, Milton, *Assimilation in American Life*, 1964

26) *Newsweek*, August 9, 1993, 19.

表1 カナダとアメリカにおける移民文化の保持に好意をよせる人の割合

	カナダ					
	非フランス系		フランス系		アメリカ	
	(%)	(数)	(%)	(数)	(%)	(数)
年齢						
30 未満	49	182	33	45	62	245
30-39	38	167	39	46	56	250
40-59	34	216	31	64	41	280
60 以上	26	96	29	38	30	198
教育						
小学・中学	28	177	27	64	38	108
高校	39	196	36	45	43	309
専門学校	33	136	39	43	54	317
大学	50	100	38	26	51	231

資料 Reitz, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 30.  
Maclean's / Decima survey 1989.

特定のマイノリティ・グループを選んで比較することが必要である<sup>27)</sup>。

以上、五つの仮設的主張はこれまでのところ、いずれも、信じられているほど決定的な相違とは断定出来ず、適切な方法で今後測定すべき課題なのである。

## [2] マイノリティ文化の保持

前節でカナダの文化多元主義の政策について考察したが、次にエスニック・マイノリティ文化の保持について、アメリカとカナダの違いを五つの側面から検討してみよう。それは、①先祖の認知度、②エスニック集団への帰属感、③国際結婚と複数の母国、④母国語の保持、⑤エスニック・グループとの相互作用と活動の五つである<sup>28)</sup>。

### (1) 先祖に関する認識

先祖に関する認知については明確な断定は出来ないが、先祖の認知の不確かな人がカナダよりもアメリカにやや多い。

カナダでは1965年のエスニック・リレーションズ・スタデーの調査で9%の人が先祖は知らないと答えている。またアメリカでは8.6% (1972～

77, N. O. R. C)、10% (1977～1980 同調査)、15% (アルバニーのニューヨーク州調査) の人が先祖は不明と答えている<sup>29)</sup>。

しかしながらこの相違はヨーロッパからの移民の1世がカナダに多く、3世または4世の割合がアメリカの方に多いことに帰因している。移民も世代を重ねると先祖の記憶がうすれ、ことに国際結婚がなされると複数の母国をもつことになるから特にそうである<sup>30)</sup>。

そこで若干の違いはあるものの、世代構成を考慮に入ると、カナダの方がアメリカ人よりも、先祖についての認知が明確であると断定することは出来ない<sup>31)</sup>。

### (2) エスニック・グループへの帰属感

カナダにはエスニック・グループへの帰属感を質問した調査がいくつか存在している。表2には五つの調査結果が集約されているが、エスニック・グループへの帰属感をあげ数値が14%から48%にわたっており、ハイフォンつきまで入れると14%から64%までとなる (これは一部は調査のタイミング、ワーディング、調査地域によっても差異が生み出されている)。

カナダ人と答えた人の割合も調査毎に異なり

27) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 9.

28) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 41.

29) Canada—The Ethnic Relations Study in 1965. The Royal Commission on Bilingualism and Biculturalism., USA—The National Opinion Research Center—General Social Survey, 1972-77, 1977-1980.

30) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 41.

31) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 45, 61.

36%から86%にわたっている。若し86%を無視しても36%から59%まで分散している。

時系列による変化についてみると、1973年調査では、成人してから移民した人のエスニックへの帰属感（ハイフォンつきを加え）67.9%、2世は23.9%、3世は17%であった<sup>32)</sup>。1980年のウェニペッグとエドモントンの調査では「父母」についても調べている。ウェニペッグでは「本人」の場合には、エスニックは60%、「父母」の場合には78%、エドモントンでは本人が45%と「父母」は67%がエスニックをあげている<sup>33)</sup>。

アメリカではカナダ程にはエスニックへの帰属

感を質問した調査は多くない。このこと自体がエスニックが顕著でないことを示唆している。アメリカに存在する調査資料を整理したのが表3である。これによると、帰属の対象としてエスニック・グループをあげたのは44%から61%にまで分散している。

これらの資料によって得られた結果から判断すると両国の間に大きな差はなく、カナダは「文化的モザイク」でアメリカは「メルティング・ポット」とする十分な論拠は見当たらない。

次の問題は「エスニック集団の重要性」である。アメリカとカナダの調査を整理すると表4のよう

表2 エスニックへの帰属感についてのカナダの調査結果

	帰属感の対象				標本数
	エスニック	ハイフォン付	カナダ人	その他	
	(回答者の割合)				
全国1973	14	—	86	—	44,000
全国1974	23	18	59	—	1,849
五大都市1973	18	46	36	—	2,433
ウェニペッグとエドモントン1980	43	9	40	8	730
ウェニペッグ1983	48	13	36	4	520

資料：Reity, J. G., and Reymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 46.

表3 エスニックへの帰属感についてのアメリカの調査結果

帰属の対象	CPS <sup>a</sup>		センサス 1980	ミシガン選挙の調査 <sup>b</sup>			NORC-GSS <sup>c</sup>		アルバ 1985	ワルディンガー		
	1972	1979		1972	1974	1976	1972-77	1977-80		白人	黒人	スペイン語系
	(回答の割合)											
エスニック/一国	60	44	52	61	57	54	53	48	45	47	8	52
人種又は文化団体	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	63	70
二国以上 <sup>c</sup>	—	38	31	12	14	10	37	42	22	11	2	1
一国と思われる	—	—	—	—	—	—	25	29	—	—	—	—
なしと思われる	—	—	—	—	—	—	12	13	—	—	—	—
アメリカ人	—	6	6	10	10	5	1	—	—	27	6	4
その他	31	—	1	9	12	8	—	—	—	7	14	19
なし	—	—	—	8	10	20	—	—	33	1	2	1
知らない/無回答	—	11	10	9	10	12	9	10	—	3	4	3
回答者数	205,000	217,000	226,546	2,397	1,404	1,954	7,983	3,538	460	1,935	1,935	1,935

注 a 最近の人口調査

b 非黒人のみ

c いくつかの国を含む地域と（例えば中央ヨーロッパ）と複数国

d National Opinion Research Center-General Social Survey.

資料：Reity, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 48.

Smith 1980, 82 (CPS for 1972); United States, Bureau of the Census 1983, 4 (CPS for 1979 and Census 1980); Smith 1980, 83 (Michigan Election Studies); Smith 1980, 85 (NORC-GSS results, whites only); Alba and Chamlin 1983, 241 (NORC-GSS results); Alba 1990, 53; Waldinger 1989, 61.

32) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 46.

33) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 47.

表4 エスニシティの主観的重要性に関するアメリカとカナダの調査結果

	重要性の程度					標本数
	重要	いくらか重要	普通	あまり重要でない	全く重要でない	
	(回答の比率)					
トロント1979	16	25	—	34	25	2,310
カナダ1986	29	29	—	29	12	1,834
ウェニベッグ1983 <sup>a</sup>	49	18	14	6	13	513
アルバニー1985 <sup>b</sup>						
一つの先祖	34	—	—	40	26	— <sup>a</sup>
複数の先祖	17	—	—	45	38	— <sup>a</sup>

a 国内生まれの白人のみ

b 数は不明, 全標本数は524

資料 Reity, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994, 50.

Breton et al. 1990, 115 (Toronto, 1979); Ponting 1986 (Canada, 1986); Goldstein and Segall 1985, 65 (Winnipeg, 1983); Alba 1990, 68 (Albany, 1985).

表5 アメリカとカナダにおける特定のエスニック・グループ(と全人口比)の国内生まれの族内婚の割合

	カナダ			アメリカ	
	内婚		1981の 人口の割合	内婚 1980	1980の 人口の割合
	1971	1981			
ブリティッシュ系	50.0	74.2	40.2	—	44.0
イギリス系	65.6	—	—	56.1	21.9
アイルランド系	26.9	—	—	39.5	17.7
スコットランド系	27.5	—	—	21.2	4.4
フランス系	86.5	86.7	26.7	21.4	5.7
ドイツ系	38.3	35.0	4.7	48.6	21.7
イタリア系	30.1	25.8	3.1	39.5	5.4
オランダ系	65.2	26.3	1.7	19.3	2.8
ポーランド系	24.1	13.6	1.1	29.8	3.6
スウェーデン系	—	—	—	13.2	1.9
ノルウェー系	13.6	13.2	1.2	22.0	1.5
デンマーク系	—	—	—	9.0	0.7
ウクライナ系	45.0	36.0	2.2	—	—

a 女性の内婚, カナダ1971を除く。

資料 Reitz, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994, 53.

Richard 1991, 110 (Canada); Richard forthcoming, table 8.3 (Canada); Lieberman and Waters 1988, 34, 173 (United States).

になる。これによると、カナダ人はアメリカ人よりエスニシティを重要と考えている。

「トロント調査(1979)」と「カナダ全国調査(1983)」では世代に応じて変化がみられる。

「カナダ全国調査」はイギリス系とフランス系以外の回答者のうちエスニシティは「あまり重要でない、または全く重要でない」と答えた人が1世で36%、3世で58%いた。またニューヨーク州の「アルバニー調査(1985)」では単一祖先では3

世が66%、4世が78%の人は「あまり重要でない、または全く重要でない」と答えている。さらに「トロント調査」ではドイツ、イタリア、ユダヤ、ウクライナ系の人で「あまり重要でない、または全く重要でない」という答えが1世37%、2世49%、3世75%であった<sup>34)</sup>。

これから推してカナダ人の方がエスニシティが重要であると考えていると判断されるが、調査資料が同一基準によるものでないため、この比較は

34) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994, 50.

表6 カナダとアメリカの特定のエスニック・グループ別にみた英語以外の言語の普通の使用1976  
(14歳以上)

言語	国内生まれ		外国生まれ	
	カナダ	アメリカ	カナダ系	アメリカ
(パーセント)				
中国系	39.6	10.0	79.4	65.9
オランダ系	4.2	—	18.9	—
ドイツ系	6.1	3.6	34.6	7.7
ギリシャ系	52.5	2.5	80.4	53.4
ハンガリー系	8.4	—	50.7	—
イタリア系	29.2	1.4	73.9	34.8
日系	—	9.7	—	46.6
ポーランド系	8.0	2.3	55.1	35.2
ポルトガル系	56.9	3.5	79.5	62.1
ロシア系	—	1.0	—	12.3
スカンディナヴィア系	1.0	0.4	12.7	5.1
スペイン語グループ	—	35.2	—	71.0
不明	11.3	—	65.0	—

資料 Reity, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference* 1994. 55-57.  
Statistics Canada, special tabulation (Canada); Veltman 1983, 49, 59 (United States).

完全なものとはいえない。

### (3) 国際結婚と複数の母国

表5には両国の国内生まれの女性の族内婚の比率が示されている。これによると、まず第1にイギリス系、フランス系、オランダ系はカナダの方が族内婚が高く、他(ドイツ系、イタリア系、ポーランド系)はアメリカの方が高い。これはそれぞれの人口のサイズと世代構成に帰因するものと推定される。次にカナダのフランス系とアメリカのドイツ系は人口が多いので族内婚が高くなるのは当然のことと見なされる。第三にイギリス系の族内婚はアメリカの方が低く、カナダの方が高くなっているのは3世の割合がアメリカ(92%)の方が多く、カナダ(62%)が少いことに帰せられる。他ははっきりと説明することが困難である<sup>35)</sup>。

国際結婚と複数の母国のデータからはアメリカの方がカナダよりも同化主義的であるとの示唆は得られない<sup>36)</sup>。国際結婚は両国ともよくなされており、いずれも世代を重ねる毎に増加している。勿論これはエスニック・グループ毎に違いがあるが、一般的にあって規模の大きい集団では集団内

結婚が多く、小さな集団では他の集団との結婚の割合が多くなる。また族内婚の率はその集団内の世代の割合によっても異なる。

### (4) 母国語の保持

表6に見られるように、エスニックの言語の喪失は両国ともに見られるが、その程度はアメリカの方がやや大きい。この結果について留意すべきことは、第一に、多分利用したデータの性格に影響されていると考えられる。カナダのデータは家庭で用いる言葉について調べたものであるのに対して、アメリカのデータは一般的に用いる言語について調べたものだからである。第二に文化接触変容にしたがって両国ともに母語使用率の幅の平準化が進行する。第三に、時間とともに、言語が失なわれている点では同じ型を示している<sup>37)</sup>。

カナダについては1973年に「非公式言語」の調査がなされたが、それによってもほぼ同様の結果が得られた。第一に、言語の保持はグループによって異(22.6%~78.8%)なる。第二に2・3世になると、次第に異なり方の幅が減少する。第三に世代を重ねるにつれて母国語の使用はへる。両

35) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 52. 53.

36) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 54.

37) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 55-57.



国とも3世になるとエスニック言語の知識も使用も両国とも大きく失なわれている<sup>38)</sup>。このようにみると言語の保持についても両国の違いを明確にする為にはさらなる比較研究が必要である。

### (5) エスニック・グループとの社会的交流と活動

1973年カナダの「非公式言語研究」によって、3人に1人はエスニック・グループに属していることが明らかにされた。またニューヨーク州のアルバニーの調査でも白人の親しい友人5人のうち3分の1はエスニックにもとづくものであることが知られた<sup>39)</sup>。

エスニック・グループとの社会的絆の形成の重要性や社会的参加の型の違いは両国においてそれほど大きくない。エスニック文化のある要素が捨てられても、状況の変化に応じて他の新しい型が存在することもある。エスニック文化が人々の組織や活動に小さな影響しか与えないとしても、ある程度、今日の文化に生き続けている。さらにエスニック文化はその集団の大抵のメンバーにとって次第に問題にならなくても、アカデミックな領域、芸術家、文学や他の文化的制度に関係する専門家やインテリにとっては重要になることもあり得る。アメリカ社会におけるエスニシティの現代的な意義についてのガンスの分析は両国に妥当するものと思われる。

ガンスの見解は三世までの間にエスニシティは象徴的なものになるというものである。すなわち人々は次第にエスニック文化と組織そのもの——聖なるものであれ世俗的なものであれ——には関心をもたなくなるが、代わりに帰属感を維持することに関心をもつようになるのである。人々はエスニック・グループに帰属感を持つようになるが、この段階になると帰属感は「行動」や「社会的関係の形成」にはつながらないのである<sup>40)</sup>。ガンスの見解はクラルトの1971年のセンサスの分析から引出された結論——カナダは考えられている

ように文化多元的社会ではない——によっても確かめられている<sup>41)</sup>。エスニック集団の成員は一般にエスニックの出身国(地)には最小限のところまで接触を保ちつつ、より広いカナダ社会の一部になっているのである<sup>42)</sup>。

アメリカのヨーロッパ系の集団はすでに大部分は3世以上になっているが、カナダではまだ1世や2世が主流をなしている。この世代構成の違いを前提とすれば、ガンスの仮設はアメリカよりもカナダにおいて明瞭に観察されよう。にもかかわらず、これまで考察して来たところでは両国ともほとんど同じペースで「象徴的エスニシティ」に向いつつある。これはさまざまな世代にわたって明確に観察されるものである<sup>43)</sup>。

これまでエスニック文化の保持について五つの側面から吟味して来たが、これを総合すると、文化保持について両国には若干の違いがあるもののそれは人口の世代構成などの影響によるものであり、両国において本質的、決定的な相違があるとは判定出来ないことが明らかになった。

### [3] マイノリティへの偏見と差別

次にエスニック・マイノリティに対する偏見や差別について両国のあいだにどのような違いがあるかについて考察してみよう。

職場や住居など公的な領域における差別は社会的に受入れられないだけでなく、違法とされるようになったため、露骨な形の差別は次第に影をひそめつつある。しかし以前にくらべて少なくなったとはいえ、ことに「私的な領域」では偏見や差別はかくされた形で依然として存在している。人々は真実の態度をいつわり、かくれた形で差別をおこなっており、差別的な状況を放置している。このような態度や行動をオルポートやターケルが行ったように、白日の下にさらすことは容易

38) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 58.

39) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 59.

40) Gans, Herbert J. 1979. "Symbolic Ethnicity: The Future of Ethnic Groups and Cultures." *Ethnic and Racial Studies* 2: 1-20.

41) Kralt, John. 1977. *Ethnic Origins of Canadians*. 1971 Census of Canada Profile Studies, Volume V, Part 1. 81.

42) Kralt, J. 1977. *Ethnic Origins of Canadian*, 82.

43) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 62-63.

なことではない。ここでは基本的な形態の偏見と差別について、アメリカとカナダの間に差異があるのかどうかについて検討したい。アメリカに比べカナダの方が差別が少ないという仮説が事実かどうかを検証してみよう。

#### (1) 人種主義的差別の衰退と個人心理的説明

ジャynesとウィリヤムズによると両国において黒人に対する態度は、人種的平等の原則に向かって着実に前進しているという<sup>44)</sup>。様々な状況における白人と黒人の社会的距離も次第に縮少しつつある。

アメリカの調査データによると、露骨な人種主義は今やごくわずかな特別の人達によって表明されているにすぎない。ジューマン、ステース、ボブ等によると1940年代には「黒人も生まれつき白人と平等の資質、知性を持っているから、同じ教育と訓練を受けることが出来れば、同じ業績をあげることが出来る」と考える人は南部以外のアメリカ人では50~60%にすぎなかったが、50年代からは90%に拡大した<sup>45)</sup>。

1990年にデシマ調査社が行った調査資料によって両国の比較が可能となった。それによれば露骨な人種主義者の割合は、アメリカよりカナダの方が少ないが、その違いはごくわずかである。「すべての人種は平等である」に同意する人はカナダ90%にアメリカ86%である<sup>46)</sup>。この違いは実質的なものとは言えない。両国とも大多数の人は露骨な人種主義者を否定している。人種主義が公けに論議されるときも露骨な人種主義ではなく、かくれた人種主義であり、消極的な人種主義のステレオタイプである。

ところがアメリカの調査によると、人種主義を否定したにもかかわらず、そのうちのいくらかの人は簡単に人種主義的見解をさらけ出してしま

ことがある。例えばアメリカ人が「なぜ黒人はそんなに貧しいのか」と聞かれると、かなりの人は黒人は生まれつき劣等な人種だからであると答えてしまう。

ゼネラル・ソーシャル・サーベイでは1988年と1989年に次のような質問の調査を実施した。

一般に黒人は仕事、収入、住宅で白人より条件が悪いのは何故でしょう。その理由は何だと思えますか。

- a. 主に差別のため
- b. 生まれつき能力が劣る
- c. 黒人は貧困に立ち向うための教育の機会に恵まれない
- d. 貧困に立ち向う行動の動機づけや意志力がとぼしいこと

この問いに対して (b) またはこれを含む答えをした人が20.8%もいた<sup>47)</sup>。すべての人種は平等だという見解にあからさまに挑戦する白人は少ないが、黒人の貧困の理由について質問されると、かなりの人が人種的に劣等との含意を持つ答えをするのである<sup>48)</sup>。

露骨な人種主義から脱皮したアメリカ人が採り易いもう一つの途はクルーゲルが不平等についての「個人心理的説明」と呼ぶ態度である<sup>49)</sup>。黒人は動機づけがとぼしく、劣った文化の保持者であると彼等は考えている。彼等は黒人は教育と雇用の機会を与えられていないが故に余儀なく差別を受けるのだという「構造主義的説明」(c)をも否定しているのである。

調査がなされた時期(1977~1989)を通じて、大抵の人(約7割)は個人の心理に原因があると説明(d)に賛成しており、黒人が重大な差別に直面していると考えた人は25~30%にすぎなかった。

44) Jaynes, Gerald David, and Robin M. Williams, Jr. 1989. *A Common Destiny: Blacks and American Society*. Washington, D. C. : National Academy Press.

45) Schuman, Howard, Charlotte Steeh, and Laurence Bobo. 1985. *Racial Attitudes in America: Trends and Interpretations*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 125.

46) Maclean's. 1990. "Portrait of Two Nations: Should the two Countries Become One?" June 25, 37-52.

47) Kluegel, James R., 1990. "Trends in Whites' Explanations of the Black-White Gap in Socioeconomic Status, 1977-1989." *American Sociological Review* 55, 4 : 512-525.

48) Kluegel, James R., and Eliot R. Smith. 1986. *Beliefs about Inequality: Americans' Views of What Is and What Ought to Be*. New York : Aldine de Gruyter. 188.

49) Kluegel, James R. 1990. "Trends in Whites' Explanations of the Black-White Gap in Socioeconomic Status, 1977-1989." *American Sociological Review* 55, 4 : 515.

表7 アメリカにおけるエスニックと人種集団の社会的距離(1926-1990)

(ボガードスの社会的距離によって測定したもの)

	1926	1946	1956	1966	1977	1990
(ボガードスの尺度に含まれた集団)						
アメリカ人(US白人)	1.10	1.04	1.08	1.07	1.25	1.13
イギリス系	1.06	1.13	1.23	1.14	1.39	1.15
カナダ人	1.13	1.11	1.16	1.15	1.42	1.19
イタリア系	1.94	2.28	1.89	1.51	1.65	1.36
フランス系	1.32	1.31	1.47	1.36	1.58	1.37
ドイツ系	1.46	1.59	1.61	1.54	1.87	1.39
アメリカ・インディアン	2.38	2.45	2.35	2.18	1.84	1.59
ポーランド系	2.01	1.84	2.07	1.98	2.11	1.68
ユダヤ系	2.39	2.32	2.15	1.97	2.01	1.71
黒人	3.28	3.60	2.74	2.56	2.03	1.73
中国系	3.36	2.50	2.68	2.34	2.29	1.76
日系	2.80	3.61	2.70	2.41	2.38	1.86
ロシア系	1.88	1.83	2.56	2.38	2.57	1.93
韓国系	3.60	3.05	2.83	2.51	2.63	1.94
メキシコ系	2.69	2.89	2.79	2.56	2.40	2.00
(ボガードスの尺度に含まれない集団)						
イスラエル系	—	—	—	—	—	2.63
パレスティナ系	—	—	—	—	—	2.78
イラン系	—	—	—	—	—	3.03
分散	2.54	2.57	1.75	1.49	1.38	1.90
分散の変化		+0.03	-0.82	-0.26	-0.11	+0.52

資料 Reity, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference* 1994. 75.  
Sinha and Berry 1991, 7.

カナダにはアメリカの調査と厳密な意味で同じ資料はないが、1987年になされたカナダ・チャーター・スタディの調査の対象は黒人ではないが、黒人と同じマイノリティとしての移民を対象としているので、これに類似した資料を提供するものである。この資料によると、約70%の回答者は、「移民は自身の個人的態度や習慣によって差別をひきおこす」という考えに賛同している<sup>50)</sup>。

このように差別を個人的に説明する割合(70%)はアメリカのものと同様であった。

## (2) 社会的距離

### 1) 黒人とマイノリティに対する態度

社会的距離とは有勢な集団が特定のマイノリ

ティのメンバーと社会関係を持つ際に示す寛容さの尺度である。特定のマイノリティにとって、社会的距離はマジョリティに対して、結婚した夫婦や家族の成員のように近い関係を持てる時には近く、もっと疎遠な関係しか持てない時に距離は遠くなる。社会的距離が遠い時にはマジョリティの人はマイノリティの成員を隣人、協働者、移民としても喜んで受入れようとはしないであろう。

アメリカのデータによると、有勢なイギリス出身のグループからみて社会的距離が最も遠いのは黒人と他の人種的マイノリティで、次いで遠いのは南ヨーロッパ系で、最も近いのは北ヨーロッパの人達である<sup>51)</sup>。1920年代から実施されて来た大

50) Sniderman, et al. 1991. "Political Culture and the Problems of Double Standards : Mass and Elite Attitudes Toward Language Rights in the Canadian Charter of Rights and Freedoms." *Canadian Journal of Political Science* 22, 2 : 259-284.

51) Bogardus, Emory S. 1958. "Racial Distance Changes in the United States During the Past Thirty Years." *Sociology and Social Research* 43 : 127-135.

Bogardus, Emory S. 1967. *A Forty-Years Racial Distance Study*. Los Angeles : University of Southern California Press.

表8 カナダにおけるマイノリティ・グループの社会的地位

マイノリティ・グループ	格付された社会的地位	
	イギリス系のカナダ人	フランス系のカナダ人
自分の集団	83.1	77.6
イギリス系	82.4	77.6
イタリア系	43.1	51.3
フランス系	60.1	72.4
ドイツ系	48.7	40.5
カナダ・インディアン	28.3	32.5
ポーランド系	42.0	38.0
ユダヤ系	46.1	43.1
黒人	25.4	23.5
中国系	33.1	24.9
日系	34.7	27.8
ロシア系	35.8	33.2

注：カテゴリーは表7に合わせた。ただし一部は除かれている。

資料：Reity, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference* 1994, 76.  
Pineo 1977, 154.

学の社会科学系の学生についての調査結果によると、様々のマイノリティ・グループの社会的距離は年とともに縮小して来たが、順位は一定で持続している<sup>52)</sup>。表7はアメリカで人種とエスニック・グループが1926年から1990年までの間にどのように順位づけられて来たかを示している。

カナダにおいてこれに対応した研究としてはピオネ等の社会的地位 (Social Standing) の研究があげられよう。表8の結果は表7のアメリカのマイノリティの順序と同じ順序を示している。黒人とアジア系を含む人種的マイノリティは最低のところであり、南ヨーロッパはそれより高く、北ヨーロッパが最高である。ドリージャーとメゾフもマニトバ大学の学生のデータから同じ結果を得ている<sup>53)</sup>。

また学生のサンプルにもとづく社会的距離の指標値はアメリカとカナダでほぼ同じ結果を得ている<sup>54)</sup>。アメリカの黒人の値は2.03でカナダの黒人は2.12であった。中国人はアメリカが2.29に対し

カナダは2.33であり、メキシコ系はアメリカ2.40、カナダ2.38、日系はアメリカ2.38とカナダ2.40であった。これらはかなり近似した値である。ただ一つ例外はアメリカのインディア人が1.84であったのに、カナダのインディアンは2.70と高かったことである<sup>55)</sup>。

## 2) 移民に対する態度

社会的距離の測定に関連してとりあげられるのは移民の集団に対する態度である。人種的マイノリティの比率は、今日、アメリカよりもカナダの方が多という事実にもかかわらず、カナダ人はアメリカ人よりも移民に好意を持っていると考えられている。1990年に実施されたデシマ調査によると、アメリカ人の58%は移民が少なくなることを望んでおり、もっと多い方がよいと答えたのはわずか6%にすぎなかった。これに対して、39%のカナダ人は移民が少なくなることを望み、18%の人が移民は多い方がよいと答えている<sup>56)</sup>。また1976年のギャラップ世論調査では63%のカナダ

52) Owen, Carolyn, Howard C. Eisner, and Thomas R. McFaul. 1981. "A Half-Century of Social Distance Research: National Replication of the Bogardus' Studies". *Sociology and Social Research* 66, 1: 80-98.

Sinha, Murlil M., and Brian Berry. 1991. "Ethnicity, Stigmatized Groups and Social Distance: An Expanded Update of the Bogardus Scale." Paper presented at the annual meeting of the American Sociological Association, Cincinnati, August 23-27.

53) Driedger, Leo, and Richard Mezoff. 1981. "Ethnic Prejudice and Discrimination in Winnipeg High Schools." *Canadian Journal of Sociology* 6: 1-17.

54) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994, 74.

55) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994, 75-76.

56) *Maclean's* 1990. "Portrait of Two Nations: Should the Two Countries Become One?" June 25, 52.

人が人種による制限には反対し、わずかに27%の人が制限に賛成しただけである。さらに1981年には、非白人の移民を減らすことを支持したのはわずかに10%であった。

移民に対する感情は国内の景気や国の政策によって決まる移民数の増減に大きく左右される。アメリカの場合には1960年代のあと移民が急増したので否定的な方向に変化した。一連の比較可能な調査データによると、1965年には移民が減少することを望むアメリカ人は33%であったが、1993年には61%に増加した<sup>57)</sup>。

カナダでも似た傾向がみられるようになった。アングス・ライド・グループ社によると移民があまり多すぎると考えるカナダ人の割合は1988年5月に30%から1989年2月には31%に、さらに同年8月には43%に増加した<sup>58)</sup>。またエコス調査社の世論調査ではこの割合は1994年2月には53%にまで上昇している<sup>59)</sup>。ところが1986年と1989年に行われたエンビロン世論調査ではカナダにはあまりに多くの移民が流入していると述べた人は66%から57%に低下していると報じている<sup>60)</sup>。

移民に対する態度は国家の移民政策にも影響を受けるものである。移民に対するカナダのいくらか積極的な態度は文化的な特性よりも、むしろその国の歴史的制度的脈絡を反映している。大部分はヨーロッパ出身であった戦後のカナダ移民の受け入れは国家の社会経済発展政策を推進するための主要な柱であった。ところが他方アメリカでは、ライマーとトロッパーが指摘しているように、移民の受け入れは社会経済発展政策としてではなく、社会政策と見なされており、次第に公的支持が低

下している<sup>61)</sup>。

1979年トロントで行われた調査では「マジョリティのカナダ人」の63%の人は、「現行の移民法はあるグループにとって、カナダにあまりにも容易に入国出来るようになっている」という意見に賛成している<sup>62)</sup>。

アメリカのニュース・ウィークの世論調査はある国(地域)からアメリカへの移住を容易にすべきか、厳しくすべきかという質問に対して回答者の約半分は「中国、アジア」からアメリカへの移民をもっと厳しくすべきと答えている。また61%の人は「中東」からの移民をもっと厳しくすべきだと答えている<sup>63)</sup>。

以上これらのデータからみてアメリカとカナダにみられる移民への態度はほぼ等しいものであるといえる。

### 3) コミュニティと近隣居住

隣人として人種的マイノリティを受入れるかについては両国にかなりの相違がみられた。ミカロズが収集した比較可能なギャラップの調査データによると1963年にはわずか3%のカナダ人が、もし有色人種が隣りに住んだら引っ越すと答え、91%の人はそのまま居ると答えたと述べられている。その時期にアメリカでは20%の人が移住し55%の人がそのままいると答えている<sup>64)</sup>。

勿論、この数値も時代とともに変化している。1960年代の終わり頃になると、アメリカでも隣りに黒人が来ても引っ越したい人は12%に減少し、住みつづけたいと思う人は65%に増加した。さらに1978年には隣人によって引っ越したいという人は10%に減少した<sup>65)</sup>。

57) *New York Times*, June 27, 1993, 1 and 16.

58) Angus Reid Group Inc. 1989. *Immigration to Canada : Aspects of Public Opinion*, Report prepared for Employment and Immigration Canada. Winnipeg : Angus Reid Group Inc. 4-5.

59) *Globe and Mail* [Toronto] , March 10, 1994, p. A1.

60) Angus Reid Group Inc. 1989. *Immigration to Canada : Aspects of Public Opinion*. 5.

61) Reimers, David M., and Harold Troper. 1992. "Canadian and American Immigration Policy since 1945." In *Immigration, Language and Ethnicity : Canada and the United States*, edited by Barry R. Chiswick, 15-54. Washington, DC : AEI Press.

62) Breton et al. 1990. *Ethnic Identity and Inequality : Varieties of Experience in a Canadian City*. Toronto : University of Toronto Press. 204.

63) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 78-79.

64) Michalos, Alex C. 1982. *North American Social Report : A Comparative Study of the Quality of Life in Canada and the USA from 1964 to 1974*, Vol. 5., *Economics, Religion and Morality*, Dordrecht, Netherlands : D Reidel. 169, 206.

65) Schuman, Howard, Charlotte Steeh, and Lawrence Bobo. 1985. *Racial Attitudes in America : Trends and Interpretations*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press. 106-108.

しかしながら1981年ごろ、アメリカ北部では大多数の人は「大部分は白人が住む近隣」を好んでおり、4人に1人は「すべて白人が住む近隣」を選んでいる。南部では3分の2の人は「大部分が白人である近隣」を望み、「すべて白人が住む近隣」を好むのは38%から51%の間であった<sup>66)</sup>。

隣りに黒人が住むことを許すかどうかは、転居して来る黒人の人数によっても変化する。調査の数字によると、近隣社会に「大多数の黒人」が来ても引越さないと言ったのはアメリカの白人の46%にすぎないが、85%の人は隣りや同じブロックに黒人が住んだだけでは引越さないと言っている<sup>67)</sup>。

カナダ人の態度もそれほど大きく違うわけではない。アメリカの調査の質問に最も近い質問への回答では両国には大きな違いはみられない。1978～79年に実施されたトロントのエスニック・プurlリズム・サーベイの調査によると、回答者のうち3分の2の人は、もし自由に決められるものなら、隣人として西インド諸島の人を喜んで迎えると答えた。中国人、イタリア人、ポルトガル人については85%の人が隣人として受け入れると述べている<sup>68)</sup>。

したがって、この点についてもアメリカとカナダはそれ程大きく違っているわけではない。

#### 4) 社交クラブへの受入れ

私的なクラブへの人種的マイノリティの受入れは近隣社会への受入れよりも寛容性が示されている。1987年のギャラップ調査では、アメリカ人の15%、カナダ人の12%の人が私的なクラブでも人種にもとづいて会員になることを拒否する権利があると答えているにすぎない<sup>69)</sup>。社交クラブからマイノリティを締め出すことは露骨な人種主義のシンボルと見られており、締め出したいところでもそ

の実施は見合されている。この点でもアメリカとカナダはほぼ同じ状況にある。

#### 5) 人種間結婚の承認

カナダ、アメリカともに、近年、人種間の結婚にたいして寛容になって来た。カナダでは黒人と白人の結婚を否認するのは1968年には52%から1973年には35%に減少した<sup>70)</sup>。さらに1988年のギャラップ調査では承認する人が72.5%で、否認する人はわずか16%となった。

アメリカでは黒人と白人の結婚を否認する人は1968年の72%から1972年には60%に減少した<sup>71)</sup>。また1983年にも、40%の人が白人と黒人の結婚を認めた。さらに1988年のGSS (General Social Surveay) では25%のアメリカ人が黒人と白人の結婚は違法とすべきと考えている<sup>72)</sup>。

この点について両国の社会的雰囲気にはかなりの違いがみられる。1989年のデシカ調査によると、「子供の一人が人種の違う人と結婚した場合、不幸と考える」のはアメリカの回答者の32%に対し、カナダは13%であった。またアメリカ人の15%、カナダの25%の人は幸せだと回答している<sup>73)</sup>。

二国間には人種間結婚を不幸と考える人の割合は約20%の差があるから、年に2%ずつ減少すると仮定すると、カナダが約10年ほど前進していると見なすことが出来よう<sup>74)</sup>。

#### (3) 雇用上の差別

雇用における人種(或はエスニック)差別というのは求職の際や職場において、人種やエスニック出身の故に人々に不利益を与える行為である。ここでの焦点は人種的マイノリティに対する差別である。差別は複雑な現象で、様々な形態がある。差別は直接的で露骨なものもあれば間接的でかくれたものもある。直接的な差別は雇用の基準を不

66) Schuman, Steeh, and Bobo 1985, op. cit. 67.

67) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 66.

68) Breton, Raymond, et al 1990, *Ethnic Identity and Inequality: Varieties of Experience in a Canadian City*. 200.

69) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 80.

70) Michalos, Alex C. 1982. op. cit. 205.

71) Michalos, Alex C. 1982. op. cit. 205.

72) Niemi, Richard G., John Mueller, and Tom W. Smith. 1989. *Trend in Public Opinion: A Compendium of Survey Data*. New York: Greenwood Press. 170.

73) Maclean's. 1989. "Portrait of Two Nations: The Dream and Ideals of Canadians and Americans." July 3, 23-82.

74) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 82.

公平に適用した結果であるから非合法とされている。ここでの調査は「かくされた差別」を問題としている。それは意図的であったり、非意図的であったりする。

ここで人種差別の「現場実験」から発見した事実を考察してみよう。幸いそれは両国で比較が可能である。

トロントでは、ヘンリーとギンスバーグによって1984年に現場実験がなされたが、その際には白人は黒人の3倍もの仕事を得られた。次の白人が面接に呼ばれているのに黒人は白人の5倍も、「すでに採用枠は充足されたのでお引とり下さい」と告げられた。この研究によると、人種差別のためトロントの黒人は労働市場において相当に機会を失っている<sup>75)</sup>。

ヘンリーは1984年の現場実験を1989年に再現した。その新しい研究によって劇的な変化が明らかにされ、個人の雇用面接では人種差別はなくなったとカナダ経済評議会は論じている。そこで雇用者は黒人と白人を公平に扱い、寛容になったと受取られている。しかしこのような議論はあまり信用出来そうにない。というのは1989年には労働市場がひっばくしていたので、現場検証のケースのほぼ半数は、白人にチャンスを与える前に、応募した者は即決で雇用されたものであった。したがってこのケースを分析から除くと、やはり黒人よりも白人により多くの職が与えられていた。そしてその結果は1984年と実質的な変化はなかったとみられる<sup>76)</sup>。

ワシントン DC とシカゴにおける現場検証も1984年にヘンリーとギンスバーグがトロントで発見したものと同等の差別のレベルを示している。アメリカの研究では黒人に比べて白人は3倍の仕事を得ている<sup>77)</sup>。彼等はまた仕事の面接にも3倍も招待されている。もし同じ資質の黒人と白人の応募者がある仕事を目指して競う場合に、差異の

ある取扱いが許されると、白人は黒人の3倍も採用されることになる<sup>78)</sup>。

1984年のヘンリーとギンスバーグの研究(カナダ)の結果とターナー、フィクス、ストルイキの研究結果(アメリカ)の類似性から推察すると、雇用の上での差別的なやり方は両国の間でそれほど大きく違っていないことを示唆している<sup>79)</sup>。

これまで検討して来たことから、カナダとアメリカの間の人種関係の歴史の違いにもかかわらず、両国の黒人やマイノリティに対する態度と行動は、国際結婚への偏見をのぞくと、大雑把にみて、ほぼ類似したものである。両国において、露骨な人種主義は例外的で、黒人やマイノリティと他のグループとの間の社会的距離は次第に消滅に向っている。また雇用における差別の範囲も同じ程度のものである。

#### [4] 社会経済的地位の変動

次にアメリカとカナダにおける主要なマイノリティの社会経済的地位の変動について検討してみよう。

##### (1) 両国におけるマイノリティの社会的地位

###### 1) アフリカ系アメリカ人の社会的地位

1944年、グンナー・ミュルダールは「アメリカのディレンマ」(An American Dilemma)において、アメリカの民主社会の理想と現実のギャップを鋭く指摘し将来葛藤は大きくなるであろうと警告したが、これは1960年代の黒人暴動を予言したものと高く評価されている。幸い M. L. キングを先頭にした黒人の差別撤廃を求める市民権運動とこれを受けとめたケネディ政権によって市民権法が制定され、マイノリティへの優遇措置(アフーマティブ・アクション)によって事態は改善され前進した。

75) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 83.

76) Henry, Frances. 1989. "Who get the Work in 1989?" Background paper. Ottawa : Economic Council of Canada. 19-20.

77) Turner, Margey Austin, Michael Fix, and Raymond J. Struyk. 1991. *Opportunities Denied, Opportunities Diminished : Discrimination in Hiring*. Washington : Urban Institute Projections. 19.

78) Turner, Margey Austin, Michael Fix, and Raymond J. Struyk. 1991. *Opportunities Denied, Opportunities Diminished : Discrimination in Hiring*. 32.

79) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 85.

スミスとウェルチによると1940年から1980年までの間に黒人男性の賃金は、対白人の割合で43.3%から72.6%にまで上昇した。これによって若い教育を受けた黒人の生活が大いに改善された。両者によるとこの収入の上昇の半分は一般的経済成長によるものであり、残りは黒人の教育の改善——南部黒人の北部への移動と南部の教育の改善——に帰せられるものである<sup>80)</sup>。

またカールソンとスワルツは1959年から1979年までについて、同じく黒人の賃金の対白人比が54.7%から65.1%へ増加したことを指摘、さらに教育レベルと人口要因の補正を加えると74.8%から84.5%に増加したと述べている<sup>81)</sup>。

黒人女性の場合は1969年から1979年までの資料によると、白人男性に対し32.2%から43.3%に増加し、補正すると50.7%から64.9%に増加している。このように女性の場合には1979年に白人女性に比べるとほぼ等しくなった。

すなわち白人男性に比べると白人女性は44%であるのに黒人女性は43.3%に達しており、教育その他の補正をすると、62.8%（白人女性）と64.9%（黒人女性）と白人女性より高くなっている<sup>82)</sup>。

しかしながらこれらの数字をみると、アメリカ黒人を完全に白人優位の社会に統合することは、これからまだ相当に長い道のりを必要とするものと考えられる。オリバーとブリックは1962年から1973年にかけて計算された変動のデータを用いて、黒人は10世代を経ても、1962年当時の白人の職業構成を実現することは不可能であると論じている<sup>83)</sup>。統計的平均にみられる改善は不完全な幻影にすぎないという。ウィルソンによると、黒人は中産階級を形成したけれども黒人人口の内部に生み出された不平等はむしろ増大しているという<sup>84)</sup>。上昇移動の気運に乗れない黒人の下層が存

在している。この状況は経済上のリストラとラスト・ベルトからの雇用転換の進行によってむしろ悪化している。コーリンは政府の黒人雇用対策（1960年に12%から1982年に23%に増加）が政治的、財政的な理由によって左右されて、不安定であることを指摘している<sup>85)</sup>。

1980年代のレーガン期にはこの改善の方向はむしろ逆行した。黒人の所得が改善されることはなくなった。実際、ことの外、若い男性にしわよせがみられる。1970年代以来、白人に対する黒人の経済的地位は概して停滞しむしろ悪化している。この停滞の原因はアメリカ白人による変化への抵抗と1973年以来の経済的活動の低下によるものである。

要するに時代とともにエスニック黒人の経済的地位は上昇して来たが、いまま彼等は実質的な不利益をまぬがれることが出来ないでいる。

## 2) フランス系カナダ人の社会的地位

フランス系カナダ人はカナダ総人口の約3割であり、ケベック州人口の82%に達しており、フランス系の4人のうち3人はケベック州に住んでいる。フランス系をカナダ社会に統合するためにはまずカナダ内のケベックの地位を熟慮し、次にケベック内とカナダの他の地区で個人としての与えられている地位をよく考察する必要がある。

フランス系カナダ人をカナダ社会に統合するため考慮すべきこととしては政治、文化、言語および社会経済的の局面がある。

雇用においてフランス系が受ける不利益はポーターが「垂直的モザイク」で述べた1965年頃に比べるとケベックでも全カナダでも少なくなっている。1950年代から60年代にかけて進行した「静かな革命」のころ、フランス系カナダ人の教育レベル、職業上の地位、収入等はいずれも上昇した。1961年、フランス系カナダ人の所得は英国系の約

80) Smith, James P. and Finis R. Welch. 1989. "Black Economic Progress after Myrdal" *Journal of Economic Literature* 27 : 519-564.

81) Carlson, Leonard A., and Caloline Swartz. 1986. "The Earnings of Women and Ethnic Minorities, 1959-79." *Industrial and Labor Relations Review* 41, 4 : 530-546.

82) Carlson, Leonard A., and Caloline Swartz. 1986. "The Earnings of Women and Ethnic Minorities, 1959-79." *Industrial and Labor Relations Review* 41, 4 : 543.

83) Oliver, Melvin, L. and Mark A. Glick. 1982 "An Analysis of the New Orthodoxy on Black Mobility." *Social Problems* 29, 5 : 511-523.

84) Wilson, William. Julius., *The Declining Significance of Race*, 1978.

85) Collins, Sharon. 1983. "The Making of the Black Middle Class." *Social Problems* 30 : 369-82.



78%で、ヨーロッパの他の集団よりも低かった<sup>86)</sup>。しかし1981年までに対英国系との比較では90%にまで上昇し、女子の場合には英国系女子よりもわずかに少ないだけとなった<sup>87)</sup>。教育年数のことを考慮に入れると、いまやフランス系は不利益を受けていない。1970年にケベックで英語を話す人達はフランス語を話す人達より59%も収入が多かったが、1980年には22%多いだけとなった。もし教育と人的資本 (human capital) で補正するとむしろフランス語を話す人達の方が有利になっている<sup>88)</sup>。

(2) 非ヨーロッパ系移民の教育レベルと収入格差

最近、非ヨーロッパ系移民はアメリカ、カナダ双方の主要な都市においてその人口構成に大きなインパクトを与えている。カナダでは1986年には成人の6%はいわゆる「ビジブル・マイノリティ」でその90%は外国生まれである。人種的マイノリティの移民は全人口の中で重要な部分 (トロントのように約20%) を占めるようになった。ここではアジア系と黒人を中心に検討してみよう。

1) 教育レベル

アメリカの移民の教育歴は国内生まれの教育歴に比べると、年数が少ない。ボルジャヤスによるとアメリカの外国生まれの男性は国内生まれより平

均1年 (1980年) 教育年数が短かく、カナダでは外国生まれの男性は国内生まれより平均0.4年 (1981年) 長くなっている。またアメリカのラテンアメリカ系移民は国内生まれのアメリカ人より3.3年教育年数が短かいのに対してカナダのラテンアメリカ系の移民はカナダ国内生まれの人より0.8年教育年数が長い。アジア系の教育歴はアメリカでは国内生まれより1.9年長い、カナダでは2.3年も長い<sup>89)</sup>。

1980年にアメリカの国内生まれの人は12.7年の教育歴があるのに対しカナダでは11.3年であった<sup>90)</sup>。

アメリカ人の教育重視の考えは移民にも競争を激化させる環境をつくり出している。

2) 収入

移民の教育レベルがエスニック毎に相違することがエスニック毎の収入の相違をもたらしている。ことにアメリカ、カナダの双方において、非ヨーロッパ系の移民は得られると期待される額よりも少ない収入しか得られていないことが指摘されている。

問題はマイノリティの移民がこおむる不利益が両国で異なる範囲の幅がどうかということである。ボルジャヤス等は1980年のアメリカと1981年のカナダのセンサスを用いてカナダとアメリカの男

表9 アメリカとカナダへの特定男性移民の収入対イギリス生まれの男性移民の収入

1980 アメリカのデータ (Chiswick 1986から)			1981 カナダのデータ (Verma and Basavarajappa 1989から)		
出生地	相対的収入		出生地	相対的収入	
	全体	ネット		全体	ネット
南アジア	-0.24	-0.15	南アジア	+0.02	-0.19
中国	-0.39	-0.29	東アジア	-0.11	-0.25
西インド諸島	-0.47	-0.30	カリブ海人	-0.16	-0.25
ベトナム	-0.50	-0.26	東南アジア	-0.14	-0.30

資料: Reity, J. G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference* 1994, 105.  
Chiswick 1986, 187 (United States); Verma and Basavarajappa 1989, 457-458 (Canada).

86) Breton, Raymond, Jeffrey G. Reitz, and Victor F. Valentine. 1980. *Cultural Boundaries and the Cohesion of Canada*. Montreal: Institute for Research on Public Policy, 148.  
87) Li, Peter S. 1988. *Ethnic Inequality in a Class Society*. Toronto: Wall and Thompson 116.  
88) Vaillancourt, François. 1989. "Demolinguistic Trends and Canadian Institutions." In *Demolinguistic Trends and the Evolution of Canadian Institutions*. 84-87. Association for Canadian Studies, Department of the Secretary of State, and the Office of the Commissioner for Official Languages, Montreal.  
89) Borjas, George, J. 1988. *International Difference in the Labor Market Performance of Immigrants*. Karamazoo, Michigan: W. E. Upjohn Institute for Employment Research, 43.  
90) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994, 99.

表10 アメリカとカナダへの最近移住した中国移民と黒人移民の教育と収入の比較

グループ	平均教育年数	1980			標本数
		アメリカドル	全体	ネット	
<b>アメリカ男性</b>					
白人(アメリカ生まれ)	13.4	18,438			125,664
中国移民 1970-80	13.2	11,658	-0.34	-0.33	3,508
黒人移民 1970-80	12.2	10,010	-0.46	-0.33	5,011
<b>カナダ男性</b>					
白人(カナダ生まれ)	11.9	14,599			2,064
中国移民 1971-81	12.7	11,176	-0.23	-0.27	658
黒人移民 1971-81	11.9	10,113	-0.31	-0.33	341
<b>アメリカ女性</b>					
白人(アメリカ生まれ)	13.2	8,851			90,181
中国移民 1970-80	12.0	7,391	-0.16	-0.16	2,793
黒人移民 1970-80	11.8	7,351	-0.17	-0.08	4,338
<b>カナダ女性</b>					
白人(カナダ生まれ)	11.9	7,885			1,454
中国移民 1971-81	11.5	7,046	-0.11	-0.20	584
黒人移民 1971-81	11.2	6,607	-0.16	-0.15	324

資料: Reity, J. G., and Reymond Breton, *The Illusion of Differeuce*, 1994, 107.

US data are from the 1980 census microdata A file, 5/100; Canadian data are from the 1981 microdata file of individuals, 2/100.

性移民の所得を出生地別に検討した。それによると国内生まれの男性の収入に比べると、移民男性の収入はカナダの方が多いという知見を得ている。しかしもし教育と他の人口的特徴を補正すると両国の差はなくなる<sup>91)</sup>。

チェスウィックはさらに詳しく出生地グループ別に分析した。西インド諸島、ベトナム、メキシコ、その他のラテンアメリカからの男性移民はイギリス系移民の所得の半分であった。南アジアを除く、非ヨーロッパの移民はイギリス系移民にくらべ32%から39%も少ない。南アジアは24%も少なかった<sup>92)</sup>。このような低所得は低い教育レベルと乏しい人的資本 (human capital) に帰因するものであろう。もし学歴、経験、結婚上の地位、地域にもとづいて補正がなされるなら、西インド諸島、アジア、メキシコと他のラテンアメリカか

らの移民はイギリスからの移民より約30%少ない。南アジアと他のアジア、中東からの移民は15%から17%だけ少ない<sup>93)</sup>。

チェスウィックはカナダについてはアジア出身だけについて分析している。アジア生まれの移民の所得 (人口的特徴を補正すると) はイギリス系移民より18%少なかった<sup>94)</sup>。

これらの資料によると、カナダの方がアメリカよりも不平等が少ないと考えられるが、アジア・グループでは経験の内容が多様であるため、比較が厳密になされるかどうか断定は出来ない<sup>95)</sup>。

ライツはさらにチェスウィックのアメリカのデータとカナダについてバーマとベースパラジバが非ヨーロッパ移民 (1981年センサス) の所得分布について実施した分析を比較することによって、さらに有効な比較を行っている。その結果が

91) Borjas, George J. 1990. *Friends or Strangers: The Impact of Immigrants on the US Economy*. New York: Basic Books. 208-210.  
 92) Chiswick, Barry R. 1986. "Is the New Immigration Less Skilled than the Old?" *Journal of Labor Economics* 4, 2: 168-192.  
 93) Chiswick, Barry, R. 1986. "Is the New Immigration Less Skilled than the Old?" *Journal of Labor Economics* 4, 2: 177.  
 94) Chiswick, Barry, R. 1986. *Ibid.* 187.  
 95) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994. 103.

表9に示されている。それによると、西インド諸島、南アジア、東南アジア、東アジアからの移民の所得の不利益は、補正なしにみるとカナダよりアメリカの方が大きい。しかし人口の相違を補正すると、両国の収入の不利益は4%以内と非常に小さいものとなる。西インド諸島と東アジアからの移民については収入の不利益はアメリカの方が大きく、南アジアと東南アジアの移民についてはカナダの方が大きい。

さらに厳密な比較を試みるため、ライツとブレトン<sup>96)</sup>は1980年アメリカの黒人移民および中国系の移民と1981年のカナダの同じグループを比較した。これが表10である。この人達は入国して10年以内の人で都市労働者に限定されている。教育年数について、黒人移民と中国系移民を国内生まれの白人と比較すると、そのギャップはカナダよりもアメリカの方が大きい。平均して、アメリカでは黒人の男性移民は12.2年の教育歴があるのに対してカナダの黒人男性移民は11.9年である。アメリカの黒人男性の教育歴は国内生まれの白人男性より1.2年短かいのに対し、カナダの場合には両者は同じ教育歴をもっている。

さてアメリカの最近の黒人男性移民の収入は国内生まれの白人男性より46%も低く、中国系男性移民は37%低い。これを教育歴で補正するといずれも33%となる。またカナダの黒人男性移民と中国系男性移民はアメリカに比べると比較的収入が多く、カナダの白人男性にくらべ31%と23%少ないだけである。しかしこれに教育歴で補正を加えるとそれぞれ33%と27%になる<sup>96)</sup>。

以上の結果から考えて移民は白人に対して3割程度の不利益をこうむっていることが明らかにされた。また黒人と中国系ではカナダよりもアメリカでより大きな不平等を経験していることも明らかである。その理由はアメリカにおける黒人および中国系の教育歴と国内の白人の教育歴との差がカナダにおける黒人および中国系の教育歴と白人の教育歴との差よりも大きいことに帰せられる。

そこで教育歴を補正するとアメリカとカナダの間に大きな格差はないと言えよう。

## むすび

最後に、はじめにあげた既成観念（アメリカはメルティング・ポットでカナダは文化的モザイク）を全般的に検証して結論としたい。

それを三つの側面に分けてすすめる。

### (1) エスニック文化の保持

まず第一はエスニック文化の保持であるが、これについては、①先祖の認知度、②エスニック集団への帰属感、③国際結婚、④母国語の保持、⑤エスニック・グループとの相互作用に分けて検討したが、カナダの方がエスニック文化の保持がよくなされているとの既成観念を肯定する明確な資料は得られなかった。

マイノリティの文化保持に対する支持についての両国の相違は、おそらく移民および子孫の世代構成の比率とアメリカ人の教育の高さによるものであろう。移民の子孫も世代を重ねるにつれ、エスニック文化と疎遠になる反面、教育を受けた若い人はマイノリティの文化保持に好意的である。

さらに興味あることは、カナダとアメリカの間でシンボリック、政治的価値が違うことである。アメリカでは文化保持の支持が「個人主義」と結びついている。また黒人の方が白人よりも文化保持を支援している。これは、多分、黒人が黒人同様に上昇の機会を奪われている人々と同一化しているからである。マイノリティ文化を保持しようとする主張は同化主義に対立する反既成体制的、反権威主義的なものである。

カナダでは事情は全く違っている。ここでは文化保持と個人主義とは結びついていない。アメリカでは最大のマイノリティである黒人が文化保持に積極的であるのに対して、カナダでは主要なマイノリティ（フレンチ・カナディアン）は移民の文化保持に強く反対している。彼等は文化多元主義に反対である。それは自分の地位が脅やかされると考えているからである。アメリカ黒人は移民を自分達の味方と見ているのに対して、フレンチ・カナディアンは移民を手ごわい競争相手と見ている。

96) Reitz, Jeffrey G., and Raymond Breton, *The Illusion of Difference*, 1994, 106, 108.

アメリカ人はマイノリティの文化保持を個人主義の現代的反映と見て、脅威とは見ていない。文化保持を支持する人は個人主義を支持している。

ここで述べた両国間の相違は「態度」の相違であって、「行動」の違いではない。

このように文化保持を検討すると、両国の間には体系的、本質的な違いは発見することは出来ない。

## (2) 差別と不平等

1) 第2の重要な問題は差別の問題である。これについては両国間にいくらか違いがみられる。しかしその違いはマジョリティのマイノリティに対する「態度」であって「行動」ではない。またマイノリティの職業移動については両国間にそれほど重要な違いはない。

アメリカでは差別と不平等についての調査の多くは人種的偏見がなお残っていることを示唆している。

しかし両国ともに、大きなマイノリティは人種主義を明白なイデオロギーとして拒否している。両国ともに否定的な人種的態度は時間とともに急激に減少した。しかし漠然とした否定的な人種的態度はアメリカにもなお存在している。例えば、マイノリティは「不利益を受けていると非難ばかりする」とアメリカ人は感じている。また同じことがカナダにも広がっている。

2) 最も重要な国別の違いは人種的マイノリティへの「社会的距離」にみられる。これは市民として、隣人として、協同者として、家族の成員として受入れるかどうかの態度であるが、これには両国間に類似点もあるが相違点もみられた。

類似しているのはまず第1にランキング・オーダである。これは両国とも等しい。次に社会的距離は近年劇的に短縮している。第3は両国とも移民受入れの支持率が急激に低下したことである。

黒人に対して両国間の主要な相違は、隣人に対してはアメリカが遠く、社交クラブの受入れはカナダが少なく、国際結婚の支持はカナダが多い。これはその国個有の要素に関連している。

3) 雇用についての現場実験によると両国の間には実質的な差違はなかった。両国において人種問題の歴史的違いが人種に対する態度にある相違を生み出しているが、最も重要な分野——人種マ

イノリティに対する差別の傾向——に大きな差違はない。

黒人と中国人を含む移民グループはアメリカよりカナダの方が職業上相対的に高い立場を得ているが、それは移民と国内出身の教育ギャップがカナダの方が小さいからであって両国で教育の扱いが違うからではない。

4) カナダとアメリカの間の一般的な文化的な差違は両国のエスニシティと人種関係のトーンの違いを意味している。カナダ人がやや控え目である。さらにカナダの方が寛容についての意識的な伝統がある。しかしこれらの違いはそれほど決定的なものではない。

これまでの議論を総括すると、カナダに存在するエスニックに関する両国の差違という既成観念は必ずしも根拠のあるものとは言えない。両国の間には若干の違いはあるものの、それは決定的なものではなく、相違点よりも類似点が多いことが明らかにされた。また相違的は他の要因（世代別人口構成や教育レベルなど）によって説明可能であり、これらを補正すると、相違はほとんど消滅するのである。